

## 様式 C-7-1

## 平成24年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）実績報告書（研究実績報告書）

1. 機関番号	3   2   6   0   4	2. 研究機関名	大妻女子大学																													
3. 研究種目名	基盤研究(B) 平成22年度～平成25年度																															
5. 課題番号	2   2   4   0   2   0   4   9																															
6. 研究課題	日系国際児の二言語形成過程の質的研究																															
7. 研究代表者	<table border="1"> <tr> <th>研究者番号</th> <th>研究代表者名</th> <th>所属部局名</th> <th>職名</th> </tr> <tr> <td>4 0 3 5 0 5 6 6</td> <td>シバヤマ マコト 柴山 真琴</td> <td>家政学部</td> <td>教授</td> </tr> </table>				研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名	4 0 3 5 0 5 6 6	シバヤマ マコト 柴山 真琴	家政学部	教授																				
研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名																													
4 0 3 5 0 5 6 6	シバヤマ マコト 柴山 真琴	家政学部	教授																													
8. 研究分担者	<table border="1"> <thead> <tr> <th>研究者番号</th> <th>研究分担者名</th> <th>所属研究機関名・部局名</th> <th>職名</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>0 0 1 8 8 0 3 8</td> <td>タカハシ ノボル 高橋 登</td> <td>大阪教育大学・教育学部</td> <td>教授</td> </tr> <tr> <td>8 0 4 0 9 7 2 1</td> <td>イケガミ マキコ 池上 摩希子</td> <td>早稲田大学・日本語教育研究科</td> <td>教授</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>				研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名	0 0 1 8 8 0 3 8	タカハシ ノボル 高橋 登	大阪教育大学・教育学部	教授	8 0 4 0 9 7 2 1	イケガミ マキコ 池上 摩希子	早稲田大学・日本語教育研究科	教授																
研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名																													
0 0 1 8 8 0 3 8	タカハシ ノボル 高橋 登	大阪教育大学・教育学部	教授																													
8 0 4 0 9 7 2 1	イケガミ マキコ 池上 摩希子	早稲田大学・日本語教育研究科	教授																													

## 9. 研究実績の概要

本研究は、二言語の会話力と読み書き力が大きく変化する幼児期から児童期の二言語形成過程を継続的・多層的に捉え、これまでブラックボックスのままであった二言語(バイリテラシー)形成の実践過程を、ドイツ居住の独日国際児の事例に基づいて具体的に解明することを目的としている。平成24年度は、研究計画に基づいて、以下の3つの調査を実施した。

[調査1] 対象家族の親による定期的観察を行い、対象児の二言語に関わる日常行動データを収集した。

[調査2] 2012年10月26日～同11月2日まで、ドイツ・A州で海外調査を行った。対象児が通う日本語補習授業校(補習校)で、授業参観・教師からの聞き取り・資料収集を行うと共に、対象児の両親へのインタビュー調査も実施した。また、国内調査として、在日ドイツ人学校でフィールド調査を行った。

[調査3] 日本語検査とドイツ語検査(いずれも読解課題・口頭産出課題・作文課題)を行い、対象児の二言語の発達状態の3年次測定を行った。

上記調査データについては、年度末に中間分析と研究討議を行った。本年度は、前年度までのデータ収集と分析を踏まえて、学会発表と学術論文の刊行を通して研究成果を公開した。学会発表(異文化間教育学会第33回大会「ケース/パネル発表」)では、[調査3]で得た二言語検査データのうち口頭産出課題データを取り上げ、対象児の談話に教科学習言語能力が現出していく過程を縦断的・横断的に分析した。また、学術論文(『異文化間教育』36号と『質的心理学研究』12号に掲載)では、[調査1]と[調査2]で得たデータに基づいて、1)現地校と補習校に新入学した独日国際児が両校の宿題を遂行する過程、2)小学校中学年の独日国際児がドイツ語と日本語で読書をするようになる過程、を質的に解明した。いずれも具体的な実践過程を開示した点で、バイリンガル研究に新たな知見を加えることができた。